

氏名	田本 はる菜
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 8 4 2 4 号
学位授与年月日	平成 30年 3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	現代台湾における原住民と在来技術 —セデックの織物、歌舞、祭儀の復興に関する人類学的研究—

主査	筑波大学	教授	Ph.D.	内山田 康
副査	筑波大学	教授	博士（文学）	丸山 宏
副査	筑波大学	助教	博士（学術）	木村 周平
副査	横浜国立大学	名誉教授	修士（文学）	笠原 政治

#### 論文の要旨

本論文は、現代台湾において、政府による原住民文化の振興政策が実施され、市場経済が原住民の社会に浸透する状況の中で、原住民の伝統的な織物に関わる技術的实践、またそうした技術的实践に深く関わる儀礼の実践に着目して、このような実践の過程の可視化された部分と可視化されない部分からなる文化的実践の微細な複数性を丹念に記述した民族誌である。すなわち本論文は、国家主導の原住民文化の振興政策によって消滅しつつある文化がいかに関復しているのか、市場化のプロセスの中で原住民文化の商品化がいかに関進んでいるのか、原住民がこのような潮流に抗して文化をいかに関主体的に再創造しているのか、という典型的なストーリーを描くのではなく、制作の現場の複合的な関係性を記述することを試みている。著者を「娘」として生活の場に受け入れて織りを教えたセデックのインフォーマントたちは、「山の人」である。彼女らは中国語が話され近代化した町だけでなく、異なる関係性を持つ山の中にも生活の場を持っている。この含意は極めて重要である。彼女たちは、織物を商品化することもあれば、親族のために織り続けることもある。観光収入を得るために文化を演ずることもあれば、自分たちのために演ずることもある。政府による原住民文化の振興政策と市場経済は山の中に浸透していない。一方、「山の人」の生活と生活に根ざした技術は、山の中に繋がりが伸びている。「山の人」の文化には、政府の政策から、また商品化のプロセスからは見えない主要な部分があることを、この民族誌は複数性の概念を使って描いている。

第1章「序論」は、原住民の伝統織りの講習会に参加した著者が、漢人の先生から講習を受けていた原住民の姉妹に山の家以案内された出来事の記述から始まる。山の家には姉妹の母オビンが使う夫のピフが作った見慣れない道具が並んでいた。著者はこの出会いを通して、原住民の織物を商品化する振興政策とは質の異なる織物の実践に気づき、このパースペクティブから、在来技術を問い直す人類学的な探求に取り掛かる。これまでの非西洋の芸術・技術研究は、芸術作品の「額縁の内側」、すなわち作品の形式と意味を問う方法と、「額縁

の外側」、すなわち土着の文化と制度からこれを考察する方法に大別することができる。しかし、著者が出会った原住民たちは、政府が導入した制度の中で技術を実践するだけでなく、山の中でも生活を営み、その関係の中で道具を作り、生活を取り巻く様々なモノに愛着を抱き、そこで育まれた感覚を動員して技術を実践していた。技術のこのような多様な関係項とのインタラクティブな関係の過程こそが追跡され記述されねばならないと主張される。

第2章「台湾原住民と芸術・技術」では、まず台湾の人口の2%を占めるオーストロネシア語族系の原住民に対する政策が、植民地時代に始まった同化政策と教化政策と連続性を持つこと、また北米の先住民政策に倣い、原住民文化を活用した産業の育成、認証制度の整備、文化遺産の保護が進められている歴史的コンテキストが述べられる。次に原住民の芸術と技術が、同化政策と殖産政策によって工芸として、あるいは資源として位置づけられ、これが近年の原住民文化復興と連続性を持つことが示される。

第3章「セデックとその集落」では、自分たちを「セデック」と認識している原住民がどのような人々であるのかについて、研究者による客体化の歴史と、政府による民族認定のコンテキストの中で「セデック族」が認定された歴史的な過程が述べられる。セデックは自らを「山の人」と認識している。調査の対象となった原住民たちは高山から山裾へ降りて来て、徐々に漢化し、稲作を行うようになったが、特に年配者たちは山の中にも住まいを持ち続け、現在でも「山の人」の日常を併せ持っている。このような山の生活と深く結びついた感覚が、以下で取り上げる原住民の複合的な技術的な営みを考察する上で重要な鍵となると論じる。

第4章「山地へ広がる織り」では、山の生活と織りの技術の相互的な関係が論じられる。著者は本論文の冒頭に出てきたオビンと夫ピフの山の住まいに「機織り」を習いに通ううちに、山の生活の様々な「もののやり方」を学び、織りの技術が山で暮らす日常における多様なモノとの関係およびそこで培われた技と密接に関わっていることを知る。まず初めに、このような周囲世界の中で生きることと、畑から苧麻の繊維を取り出し、糸を作り、撚りかけて、整経して、ウブン（腰機）で織ること、また織り方を母親から学ぶ過程が、このような関係性の中で営まれてきたことが示される。オビンの母親の時代まで、織りの技術を持つ女性は、唇の上からこめかみにかけて美しい入れ墨をすることが許されていた。織りの技術と美しさは切り離すことができないものだった。次に、「高機」の技術移転とこれを用いた産業化が試みられた歴史を概観する。新しく導入された高機は、織り子の身体を織り機から解放したが、麻糸を縦糸として使うことができないため、木綿糸が導入された。麻糸づくりは下火になり、アクリル繊維が山地に浸透してくるが、彼女たちはこのような関係的な織りを手放したわけではない。自給の麻糸を織るときはウブンが使われることが示される。

第5章「文化政策と制作現場」では、著者のもう一人の織りの先生イワンの工房とそれが埋め込まれた諸関係を明らかにする。イワンは平地に住み、町に工房を持っている。文化産業振興政策のもと、原住民女性は工房を開き、ブランドを立ち上げ、レジャー施設を経営する。イワンは売れる商品を作る成功した企業家である。著者は、このような工房が作られ、観光客向けの製品が生産され、工作室のオーナーがコンクールに参加して賞を獲得して能力を証明する過程を可視化と呼ぶ。織られた布の図案は可視化され、その価値もまた可視化される。だが可視化されない様々な関係が消えてしまった訳ではない。イワンは週末に山の家に戻ってくることを楽しみにしている。また工房を経営する原住民女性の中には、自分が織ったものを簡単に売ろうとはせず、子供のために織っている者もいる。このようにして、原住民の織物の可視化と商品化が進む一方で、可視化されない様々な関係が織りの実践の中で息づいていることが明らかにされる。

第6章「実演される技術」では、「復興」した祭儀と歌舞の実演において露わになった異なる利害の対立、ガヤ（慣習的な規範や知識）を巡る根本的な理解の相違が引き起こす混乱した儀礼の記述を通して、再演された技術の複数的な存在様態を描き出す。牧師はガヤに基づく祭儀が演じられることを嫌い、政治的エリートはガヤを原住民の法律として政治的に再解釈している。著者が共に暮らしたオビンとピフはガヤを祖先の意思を

含むよりつかみどころのないものとして捉えている。観光客と来賓の前で演じられた豊年祭では、外部向けに在来技術が単純化して可視化されるが、準備の段階では原住民が自分たちのために異なる技術を使っている。経済的な理由で実演に参加する原住民たちがいる一方で、ガヤがない儀礼を実演することに対して老人たちが抗議したために、豊年祭は矛盾と混乱を孕みながら再演された。根本的な矛盾を抱えたまま進行した祭儀と歌舞の再演は、可視化された部分と可視化されない部分からなる原住民の織りの技術と同質の問題を提示している。原住民の在来技術の「復興」のアリーナは、平地から山へと広がり、性質を異にする複数の場から成ることが示される。

第7章「結論」では、原住民の「消えつつある技術」とこれを「復興する人々」という支配的なイメージとは異なる現実を描くことによって何ができたのかが議論される。一つ目は、モノに溢れる制作現場への着目である。認証制度は作者だけが可視化されるが、制作の現場では様々なモノと周囲の環境が重要な役割を果たしており、そのような現場で技術移転が選択的に起きている。制作の現場を関係的に捉えると一方向的に外来の卓上型が腰機を駆逐する訳ではないことが明らかになる。二つ目は織り手たちの感覚への着目である。彼女たちが政策と市場に操られて商品を作る企業家に変貌したと考えるのは誤りである。彼女たちは判読が困難な美しい装飾に魅せられて試行錯誤を続けている。また在来技術は山の生活が育む感覚にも密接に関わっている。三つ目は、山の人と国家の政策の関係である。山の人とは平地と山の間を行き来している。彼らの生活には国家と市場からは見えない部分があり、山から見た時、在来技術の「復興」プロジェクトの性質が一時的なものとして見えると結論づける。

## 審査の要旨

### 1 批評

本論文は、消えつつある伝統技術の復興というアプローチによっては捉えきれない台湾原住民の在来技術の実践の現場の複数性と複合性を、制作現場のモノとの関係、周囲世界との関係、政策よりの視点、山からの視点、山の集落の中のエリート視点、工作室を営む原住民女性たちの異なる視点、可視化された部分と可視化されない部分の間を移動する視点から丹念に描き出した動的な民族誌である。著者は平地から工作室へ通い始め、後に山の集落に住みながら緊密なフィールドワークを行い、在来技術の多様な現場から制作の複数的かつ複合的な関係性を描き出すことに成功している。民族誌として描くことができた原住民の在来文化の複数性と複合性を巡る問題を、人類学理論および社会学理論との関係においてどのように理論化するのか。他地域の先住民の文化研究との間にどのようにして生産的な対話が構築できるのか。こうした問題が今後の課題として残されているが、複雑なプロセスを異なる視座の間を移動しながら記述したこの民族誌の質は極めて高い。本研究が、台湾原住民研究に新たな地平を切り開いた学問的な貢献は高く評価される。

### 2 最終試験

平成30年1月18日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。